

Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning Volume III

Chapter 6 Teaching English to Young Learners

発表の構成

1. 著者情報
2. 本文の構成
3. 子どもの第二言語習得や外国語学習としての英語についての研究の課題
4. 子どもの第二言語習得に関する様々な要因

5. 教育学への応用

6. 結論

1. 著者情報

名前 David Nunan, Ph.D (アメリカ・カリフォルニア・アナハイム大学)

専門 TESOL (*Teaching English to Speakers of Other Languages*) Institute Director

著書 *Teaching English to Young Learners*. Anaheim: Anaheim University Press

Language and Culture: Reflective Narratives and the Emergence of Identity. New York: Routledge

Exploring Second Language Classroom Research: A Comprehensive Guide.

Boston: Heinle.

Expressions. Student book 3. Boston: Heinle & Heinle.

Go for it. Student book 1-4. Boston: Heinle & Heinle.

このレジュメは、東京学芸大学大学院国語教育専攻日本語教育コースの授業「日本語教育方法論演習」（授業担当者：南浦涼介）での大学院生で取り扱った、Hinkel, E. (Ed.) 2017. *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning*. の発表のレジュメです。教育的価値、資料的価値としてウェブでの掲載を行っておりますが、いわゆる「論文」ではありませんので、論文等への引用や掲載は固くお断りいたします。また、分析対象の著作権は著作者、資料文書の著作権は発表者に記しますので、無断転載はご遠慮ください。質問については、東京学芸大学南浦研究室 (<http://minamiura-lab.com/>) までお願いいたします。

2. 本論文の構成

Introduction and Overview	序章と概要
Defining the Young Learners	子どもの学習者の定義
Age and Acquisition	年齢と習得
The Social Context of Second Language Acquisition	第二言語習得の社会的背景
Learner Variables	学習者の不確定要素
Affect	情緒的なこと
Aptitude	素質
Learning Style and Strategies	学習スタイルと学習ストラテジー
Pedagogical Application	教育学への応用
Conclusion	結論
References	参考文献

3. 子どもの第二言語習得や外国語学習としての英語についての研究の課題

- 教育学の中でも、特に第二言語・外国語としての英語の教授法についての研究に関心が高まっている。
- しかし、子ども（特に幼い学習者）の第一言語や第二言語習得と発達との関係を調査することは、様々な要因があるため、研究者にとっては課題である。

3.1 グローバル言語としての英語

- 子どもの英語の指導法 TEYL(Teaching English to Young Learners)への関心が高まっている。
- 多くの両親が子どもに流暢な英語を話してほしいと願っている。

3.2 調査研究方法

- 子どもには、大人のようなインタビューやアンケート、テストのような調査ができない。
 - ・子どもと話をしたり、わかったことを聞きながら、子どもの力を測るツールを開発した。(Gopnik、Meltzoff Kuhl,2001)
 - ・ヨーロッパで外国語を学ぶ 7-10 歳の子どもを縦断的に研究し、学習者として学習方法をどう思うかの生の声のデータ収集をし、思いや考え、認知についてのエビデンスを初めて得た (Mihaljevic Djigunovic& Lopriore,2011 : 58)。

4. 子どもの第二言語習得に関する様々な要因

4.1 年齢

①子どもの学習者とは？

- 研究の目的に応じて定義している。
 - 典型的には 5 歳～12 歳（小学生の学齢期に焦点）
 - 胎児から思春期まで広く見ることも必要

②子どもの年齢と言語発達

i) ピアジェ：脳の生理学的な発達と認知の関係を探求した。その研究は心理的、認識論的であった。妻 Valentine とともに子どもの発達について誕生から思春期までを記述した。

<ピアジェの認知発達理論>

段階	年齢	特徴
感覚・運動段階	0～2	語彙が急速に増える
前操作段階	2～7	第 1 言語の習得を確立する
具体的操作段階	7～11	論理的に考えたり、経験から一般的概念を導き出したりすることができる
形式操作段階	思春期	形式的な操作や抽象的な操作をすることができるようになる。左脳右脳の機能分化が起きる

- 思春期以降は、母語話者のように話せるようになるのが不可能だということから、左脳と右脳の機能分化と臨界期仮説が論争的になった。(詳細→③で)

ii) **ヴィゴツキー**：第二言語習得に影響を及ぼした。社会生活の記述することで言語発達に焦点をあてる。

➤ 第二言語習得における「社会的視点の出番 (social turn)」や「社会的、文化的、歴史的な側面を重視した理論(社会構築主義 constructivist)」に対して影響を及ぼした(Block,2005)。社会言語学、社会文化理論、機能言語学、ジャンル理論、異文化コミュニケーション論などにも。

・Choi (2015,2016) の第二言語習得における創造力や想像性や遊びの役割における研究はヴィゴツキーの理論的な根拠から見ている。

③子どもの年齢と習得

i) **臨界期仮説**：言語獲得および第二言語習得において、「**臨界期**」とよばれる年齢を過ぎると言語の習得が不可能になるという仮説。

外国語学習を早く始めれば、いいという前提がある。

臨界期仮説から、期間を逸すると習得できなくなると言われている。

世界の多くの地域で、年齢の早い時期に外国語学習（特に英語）を導入している。

臨界期仮説から、期間を逸すると習得できなくなると言われている。

思春期前に外国語学習を開始すれば、習得が早いという研究がある。

言語中枢がある左脳において機能分化後は、母語話者のような言語習得は、事実上、不可能である (Penfield&Roberts,1958)。

➤ 言語習得に、脳の左脳と右脳の機能分化を根拠とした'臨界期'があるという考え方は議論の余地がある。

➤ 脳は思春期をはるかに超えて可塑性を保持している。

➤ 臨界期を支持するようなエビデンスは決定的なものではない。

ii) **発達と習得の関係**：Ellis (1994,491-92) は網羅的に研究し、一般化した。

・成人の学習者は、初期段階では習得が早い、L2 環境で暮らしている子どもたちに最終的には追いつかれる

・子どもは、母語話者のような発音を習得できる

・子どもは、母語習得のように文法を学ぶ可能性が高い

・子どもは、成人より発音や文法の到達度が高い

・第二言語の文法の習得については年齢の影響がないが、発音に関してはその限りではない。

④アジアにおける英語教育実践の実態

Nunan (2003,2013a) が調査対象の国では、早期の英語の導入がいいという考えに基づいて導入の年齢低下がみられた。

➤ 必ずしも適切でかつ十分なリソースが使われてなく、指導者の教育を含め、効果的な学習の機会を増やすカリキュラムモデルや教材になってない。

➤ トレーニングを受けた指導者（母語話者・非母語話者に関わらず）が、指導計画をたて高学年まで継続し、目標言語でのコミュニケーションの機会が与えられていれば別だが、外国語教育が小学校の他の教科や基本的な L1 リテラシー以上に行われることには価値がない。

4.2 社会的背景

①自然習得

<網掛け部分が、子どもに関係する>

	定義	備考	
主要語	学習者の目標言語が、住んでいる地域 社会の支配的な言語	アジア系移民 (in オーストラ リア) や東ヨーロッパからの 労働者 (in ドイツ) にとって	友だちや メディア から習 得。
公用語	植民地国の言語は「公用語」だが、多 くの人にとっては母語ではない言語	アジア、アフリカの植民地だ った国	
国際語	異なる言語を話す L1 話者が住んでい て、第三言語をリンガフランカ（共通 語）として採用した言語		

②教室活動

分離型プ ログラム	L2 の学習者は学校で他の学習者 から分離	学習効果はあまりない(Skutnab-Kangas) ----- 分離に対するエビデンスは不明(Ellis) ----- 欧米の短期難民プログラムは認知的・言語的・ 情緒的に効果あり。二言語で育る子どもたち の認知的・言語的に不利という考えを否定
母語保持 プログラ ム	母語の指導。その目的は、バイリ ンガリズムを促進すること	①教師はバイリンガル。子どもたちを学習内 容が理解できるようにすることが重要②イン プットは理解しやすいことばに置き換える必 要③L1 でリテラシー能力が提供されるべき (Cummins、1984)
サブマー ジョンプ ログラム	言語など特にサポートなしで、少 数派の言語学習者を主流派のクラ スに入れること	
イマー ジョンプ ログラム	第二言語で教科学習	①完全イマージョン（全ての教科学習を第二 言語で）②部分的イマージョン（一部の教科 だけを第二言語で）

③移民の多い地域や国における ESL(English as a second language)教育

・ CBI (Content-based instruction) : 内容重視 (内容に基盤をおいた) 第二言語学習

深い内容を扱いつつ、言語の習得をめざす言語教育 (immersion, adjunct, sheltered など様々
なモデルがある) 内容は、他の科目 (科学、数学、体育など) から取られる。(シェルター内容
指導=分離型指導)

・ 4つのバイリンガルプログラム : CBI に類似。学生は教科のカリキュラムの内容を学ぶ過程
で言語を取得。米国の就学前教育 (保育園・幼稚園)、初等および中等のレベルで実施

発達バイリンガルプログラム	すべての生徒が指導の必要な言語の少数民族言語のネ イティブスピーカーである
---------------	------------------------------------------

外国語のイマージョンプログラム (「一方通行」のイマージョン)	すべての学生が多数の言語のネイティブスピーカーであり、主要言語ともう1つ言語で学習
継承語イマージョン	すべての学生が言語的マイノリティコミュニティ出身で、継承言語に実際の習熟力がほとんどないか、まったくない者が対象
双方向のイマージョンプログラム	約半数の学生が少数言語のネイティブスピーカーであり、半数が主要言語のネイティブスピーカーであり、両方の言語を学びあう

③複言語主義 pluralism の考え方

多言語主義 multilingualism：ヨーロッパのように一つの地理的地域に二つ以上の言語が共存する状態を示す。あるいは複数言語を公用語にするか、どの言語の教育をするか、選択も含めた考え方で、社会の問題にかかわること。

- ・才能ある学習者のみが複数言語を習得できるイメージがあった。
- ・バイリンガル・トリリンガル・マルチリンガルの各言語領域は分離していると考えられていた。
- **トランス・ランゲージング** (バイリンガルの2つの独立した言語システムではなく、1つの言語レパートリーとして、社会的要請に応じて柔軟に駆使する。言語と教育に対する新たな理論と教育への提案) の概念も含め考えることが必要である。
- グローバル化に伴い、バイリンガル・トリリンガル・マルチリンガルを超えて、**複言語主義**に拡大している傾向がある。

複言語主義：ヨーロッパの言語的多様性はヨーロッパの豊かさであり、ヨーロッパ人としてのアイデンティティを作るために複数の言語を学ぶ必要がある。(欧州評議会)。母語に加えて二つ以上の言語を習得する。個人の内部での複数言語が共存し、個人の言語能力に焦点化。

④言語領域について

- 目的言語でのコミュニケーションを成立させるために、流動的に、言語間を行き来するプロセスを記述する (Canagarajah&Liymage, 2012 : 50)。
- 自分の持てる限りの言語能力や文化的資源など全てを駆使する (Pennycook, 2012)。

4.3 個人差

- Dornyei (2010) は、パーソナリティ、適性、モチベーション、学習スタイル、学習戦略、不安、創造性、コミュニケーション意欲、自己志向性、学習者の信念などについて分析。これらは心理的なものなので、言語能力を可視化する方法を考える必要がある (伝統的な心理学ではアンケートや観察などの手段による)。
- 心理学的アプローチの批判と、個人差に関する研究を参照 (Williams&Burden,1997)
- 最近発表された子どもの外国語学習の縦断的研究では、個々の個人差が学習成果の重要な要因となる (Mihaljevic&Lopriore,2011 : 58)。

4.4 情緒的なこと

①動機づけ

・Dornyei (2010) は、何か選択するとき、行動を起こすとき、継続するときに人の心を動かすものと定義する。

・Gardner and Lambert(1972)により

i) 道具的動機づけ：より良い仕事を得るなどの外部目的のために言語を習得するよう勉強。

ii) 統合的動機づけ：ある種の物質的な利益の欲求ではなく、目標言語コミュニティへの積極的な言語の関心と、社会的にやりとりしたいという肯定的な態度によって勉強。

➤ Dornyei (2010) は Gardner and Lambert の社会心理学的モデルを批判

②学習態度

➤ Mihaljevic Djigunovic and Lopriore (2011) は、最近の縦断的調査で、子どもが自分の学習経験のどのよう感じたかを 3 年以上の間、'smiley face'を使ったアンケートと口頭でインタビューを行い、彼らのデータを収集。子どもが自分の気持ちを明確にすることを奨励することで、研究データだけでなく、学習者の自己意識の向上につながったと感じた。

4.5 素質

身体能力や認知能力に優れている人もいるが、そうでない人もいる。言語能力が優れている人は、芸術的センスがある場合も、音楽的センスに恵まれている場合も、言語学習においては、一応でない。ライティングや文法にのみ優れている人もいる。

4.6 学習スタイルと学習ストラテジー

➤ 大人は習得と学習ストラテジーに相関があるが、子どもはみられない。

・学習者は学習プロセスが報告できた。メタ認知的および社会的/情動的な研究で最も効果があり、直接/認知活動においてはほとんど効果がなかった (Pinter, 2006)。

・学習したことを教室外で使う機会があり、その意味を概念化できた。

・ヨーロッパでの早期語学学習の主な調査では、学習者は外国語学習に対する彼らの気持ちや態度を反映して明瞭に表現できることが分かった (Enever, 2011)。

5. 教育学への応用

①教師の問題と課題

・Copland, Garton and Burns (2014) は、子どもを教える英語教師の問題と課題を特定。調査、事例研究、インタビュー、および観察など混合法アプローチで、世界的に調査した。文法・話す・書くことを教える、動機づけ、教室運営、ルールを決めること、学習を差別化することなどに問題があった。教師教育は、教授法の指導より、抱えている問題に共感し支援すること。

・学習する方法を教えることは学校の責任。学校外で使うことができるストラテジーを教えること。

②正規なカリキュラムへの組み込み

③語学学習アプリケーションの開発

④ピア・ティーチングの活用：学習者の多様性と多文化性が引き出される

⑤教室外での言葉の経験の蓄積

Munoz と Lindgren (2011) は

- ・テレビや映画で字幕を見るなどし、教室外で文脈がある中で言葉のシャワーを浴びること
- ・親が意味のある内容について、意識的に高度で質の高い外国語を使うこと

⑥複言語主義の考え方へ拡大

- 様々な研究によってますます支持されている。教室内で複数言語を使用することを奨励する（コード交換やコードミキシングがおきるので、複数言語を使用することを禁止するのは伝統的な考え）。様々な言語を使用するのは非常に自然な状態 (Choi, 2013,2015,2016)。

6. 結論

①TEYL(Teaching English to Young Learner)

- 英語を他の言語を話す子どもに教えることは研究の焦点になっている（過去 10～15 年の大規模調査研究より）。

- ・グローバル言語としての英語：ビジネス、メディア、スポーツなどの分野で加速
- ・リング・フランカ（共通語）としての英語：移動する人の増加、短期労働者、移民、難民の世界的な流れによって、現地語と英語を使用

②言語教育と社会

- 人の移動により、社会は複雑化・多様化→言語学習の新しい概念化の発展、複言語教育やトランス・ランゲージングのアプローチから、新しい教育実践やアプリケーションの開発が行われた。

③学習者の要因

- 年齢、動機づけ、個人差、意欲、学校外での言語環境、親の影響があり、要因を調査することは、研究デザインや方法論を考える上で課題である。
- 年齢の違う子どもを比較研究することは、発達の、認知的、情緒的および社会的に異なり、他のさまざまな要因を考慮する必要があるため困難が伴う。教師の指導力、カリキュラムモデル、指導のタイプ、教師のトレーニングなども含まれる。
- 世界の多くの地域では、政府や省庁などが、英語学習を義務付ける年齢を引き下げているが、年齢を下げたことへの研究エビデンスはない。

<参考資料>

・アナハイム大学オンライン TESOL（英語教授法）認定・TEYL（児童英語）認定 2017 年開講スケジュール> school>David Nunan

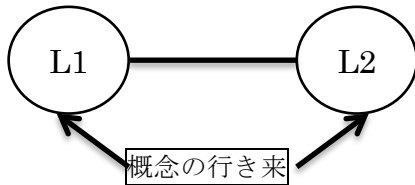
<https://www.anaheim.edu/schools-and-institutes/david-nunan-tesol-institute/certificate-in-teaching-english-to-young-learners.html>

- ・はじめての第二言語習得論講義、馬場今日子、新多了、大修館書店

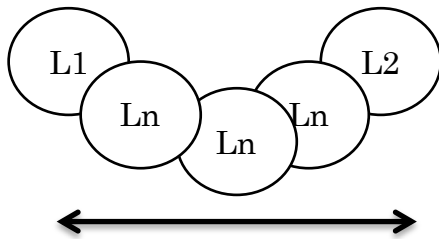
<発表後のディスカッション内容>

➤ 複言語主義をどうとらえていくか？

中国少数民族出身の学生から、子どものころ母語と中国語をミックスして使っていて中国語に修正するのに時間がかかったので、複言語主義を受け入れるのには疑問があると問題提起があった。しかし、L1、L2を区別して考えているからコードスイッチングという発想が生まれると。



トランス・ランゲージングは、2つの独立した言語システムではなく、1つの言語レパートリーとしてとらえる。複合された状態で、個人の中に複数の言語があり、それを豊かさとする。



学校の教員経験のある学生から、理論は理解できるが、学校にそういう生徒がいた場合、国語教師としては「ここまで来て欲しい」という思いや現場とのバランスに、ゆらいでしまうという意見があった。そのことに関しては、結論はでなかったが、日本の学校に多様な言語文化背景をもつ子どもたちが入学・転入してくる現状を考えると、未来への視点をもって複言語主義の考え方と向き合うことが必要だと感じた。